

東海日中関係学会は2024年1月27日、名古屋市中区の中統奨学館で「2024年新春公開研究会」を開催した（Zoomによるオンライン中継も併用）。「中華文明の歴史と現在の中国を考える」を統一テーマに、4世紀に五胡十六国を統一し北魏を建国した遊牧民族の鮮卑拓跋による「新たな中華の創造」の歴史をたどり、現代の中国共産党政権による“中華民族の偉大な復興”を考えるヒントとした。内容概要は以下の通り。

I、川村範行・東海日中関係学会会長（日中関係学会副会長、名古屋外国語大学名誉教授）の会長講話

「中国主導の世界は可能かー新たな発展理念“人類運命共同体”白書からー」。

II、松下憲一・愛知学院大学文学部教授の研究発表

「中華を生んだ遊牧民・鮮卑拓跋の歴史～ 異民族と中華文明～」

コメンテーター：平岩勇司・中日新聞社文化芸能部長（元中国総局長、東海日中関係学会運営委員）

III、若者の中国・台湾出張報告

(1) 奥谷伶央「河南省」（東海日中関係学会運営委員）、(2) 猪亦実季穂「台湾」（同）

主催 東海日中関係学会

後援 愛知大学国際中国学研究センター、日中文化協会、中日新聞社、東海日中貿易センター、愛知県日中友好協会、中部経済連合会、中部経済同友会

発表の詳細は次の通り。

I、会長講話「中国主導の世界は可能か - 新たな発展理念“人類運命共同体”白書から -」

東海日中関係学会会長・日中関係学会副会長 川村範行 （名古屋外国語大学名誉教授）



今日の世界は、米中新冷戦、ウクライナ戦争、さらに中東紛争など、百年に一度の大変動に直面している。米国などが「専制主義（権威主義）対民主主義」と国際社会を分断する主張をし、中国封じ込め政策による安全保障上の対立、経済安保のデカップリングが深刻化している。国際連合の機能不全、WTO体制の不安定化をもたらし、第二次世界大戦後の国際秩序の崩壊が心配されている。

こうした状況下で、中国は国連憲章や自由貿易の堅持を主張し、習近平国家主席の提唱する「人類運命共同体」の新理念（以下、「新理念」と略する）を国連総会決議を経て国際社会に広げようとしている。同時に中国が21世紀シルクロード構想「一带一路」建設を沿線諸国と共同で推進し、10年間で世界で最も広範囲、最大規模のプラットフォームを造り上げたという現実を見落としてはならない。米国の覇権が弱体化し、新興国によるグローバルサウスが台頭する中、中国が新理念と一带一路により、果たして世界を主導していくのか。21世紀前半の国際勢力地図を予測する上で欠かすことの出来ない視点であると考え。

### （1）先ず、中国の新理念がどういうものであるか。

中国政府の国務院新聞弁公室が2023年9月に発表した『手を携えて人類運命共同体を構築：中国のイニシアティブと行動』白書（以下、「白書」と略する）に全容が記されている。A4版で52頁にわたる長文だ。日本のメディアは、重要なこの白書と新理念の内容についてほとんど報道していない。

白書には新理念の考え方についてこう記してある。

「人類は歴史の岐路に立っている」とし、「相互依存は歴史的大勢である」「グローバルな課題にはグローバルな対応が必要である」「新しい時代には新しい理念が必要だ」と述べている。

続けて、「時代の問いに答え、将来のビジョンを描く」として、「国際関係に対する新しい考え方を確立」「グローバル・ガバナンスの新たな特徴を顕彰」「国際的なコンタクトの新しいパターンを創出」「より良い世界への新たなビジョンを構築」と記している。

### （2）次に、新理念の基本は何か。

グローバル開発（持続可能な開発：国連の2030アジェンダと合致）、グローバル安全保障（持続可能な安全保障を追究）、グローバル文明（世界の文明の多様性を尊重）という「三つのグローバル・イニシアティブの実施」を提唱し、発展、安全保障、文明の三つの側面から人類社会の進むべき道を示している。「人類が直面している現在の課題に対する包括的解決策を提供するものである」という。

この「人類運命共同体」新理念は、2013年に習近平国家主席が提案をしたことに始まる。人類運命共同体の理念は国連総会で昨年まで7年連続で決議採択され、賛成する国家が増えていることは極めて重要である。日本のメディアが報道しなくても押さえておく必要がある。白書では「新理念が全人類の共通認識を反映するもの」と自賛している。

では、中国は西側の普遍的価値を否定し、既存の秩序に挑戦しているのか。

否、「人類運命共同体の構築は、過去の秩序を覆したり、新たな秩序を作ったりすることではなく、国際ガバナンス・システムを改革・改善するための中国のプログラムを提唱するものである」と白書は諷い、国連憲章を尊重すると明言している。また、中国は、西洋の普遍的価値観に対して、「全人類の共同価値」（平和、発展、公平、正義、

民主、自由)を提唱し、これは西側の普遍的価値観を否定するものではなく、超越するものであると主張する。

### (3) 新理念を实践するのが、「一带一路」共同建設である。

2013年に習近平国家主席が提唱し、中国を起点に21世紀のシルクロード(陸のシルクロード、海のシルクロード)の再興を目指し、沿線諸国と経済協力を進めてきている。中国は過去10年間で150カ国・地域、30国際機関と「一带一路」協力協定に調印、広域経済協力の枠組みを強化した。具体的には鉄道、高速道路、港湾、空港などインフラ整備を進め、交通や物流を通じて経済発展を推進。アジア、ヨーロッパ、中近東、アフリカ、南米に到る世界で最も広範囲で最大規模の国際協力プラットフォームを造り上げたのである。

2023年10月に北京で一带一路10周年記念の「第3回一带一路国際協力サミットフォーラム」が開催され、習近平国家主席が過去10年の成果を誇ると共に、将来に向けて質の高い「一带一路」共同建設のための「8項目の行動」を宣言した。日本のメディアはほとんど報道しなかったが、この点は注目すべきである。

「8項目の行動」では、中国と欧州を結ぶ直通貨物列車の拡充を柱に、3500億人民元の融資窓口の設立や、シルクロード基金への800億元増資のほか、小口融資支援プロジェクト1000件、中国による職業教育訓練などを挙げている。過去10年に被融資国の一部が“債務の罠”に陥ったことや、現地の雇用拡大に繋がらないケースもあったことなどが西側の一部メディアなどから指摘されたが、こうした課題を克服する方策を示したと言える。「一带一路」は過去10年の規模拡大から質の向上へとこれから軌道修正される。「8項目の行動」の達成が、質の高い「一带一路」共同建設の鍵を握る。引いては、中国の提唱する「人類運命共同体」新理念の世界的な広がりを左右する。

### (4) 新理念に基づく一带一路の推進と共に、中国政府は2017年に「デジタルシルクロード」を発表したことを見逃してはならない。

翌2018年に習近平国家主席は「情報化が中華民族に千載一遇のチャンスをもたらした」と指摘した。中国の最新デジタル技術を基準とする「北京標準」と各種製品を世界各国に普及し、世界各国の産業界や情報通信技術の利用方法に多大な影響を与えている。のみならず中国の情報通信が経済、外交、軍事各分野での中国の影響力を増し、多国間協議の場での中国主導によるルール作りに大きく貢献している。これは一带一路と表裏一体となり、デジタルシルクロードを通じた中国の価値外交と影響力を広げていると言える。

中国の情報通信技術を利用した社会管理は「デジタル権威主義」や「デジタルレーニンニズム」と呼ばれる。先端技術を武器にした覇権国を意味する「テクノヘゲモニー」とも称される。例えば、通信インフラやスマートシティは、監視カメラと情報システムの連携によるテロや犯罪防止の治安対策も含まれている。中国の技術の社会実装に関する価値は、新興国や発展途上国にとって魅力的であるといわれる。

具体的なデジタルシルクロード推進を裏付ける「イニシアチブ」として、一带一路デジタル経済国際協力イニシ

アチブ（2017年）、データセキュリティに関する国際協力イニシアチブ（2020年）、一帯一路デジタル経済国際協力北京イニシアチブ（2023年）がある。地域別のデジタル関係イニシアチブとして、中国・ASEAN イニシアチブ（2020年）、中国・アラブイニシアチブ（2021年）、中国・中央アジア五カ国イニシアチブ（2022年）、BRICS イニシアチブ（2022年）と、実に広範囲に及んでいる。

**（5）中国にとって課題は3点が挙げられる。**

①中国政府の対外強権的姿勢に対する警戒感がEUの一部国家でも現われている。

②中国は米中対立の影響から半導体製品やOS、データベースなどの中核技術の不足に直面し、自国メーカー製のコンピュータへの乗り換えが困難である。

③中国製品（ファーウェイや ZTE）を経由した自国情報の漏出を警戒し、欧米や日本、インドで中国の情報通信技術や製品の導入をためらう国や通信事業者が増えている。

これらの課題をどう克服するか、が中国主導の世界の実現を左右する。

歴史を遡れば、中国で多くの諸侯が相争う紀元前 500 年頃の春秋戦国時代に、孔子や孟子、荀子、墨子、老子、荘子などの思想家が輩出し、様々な統治論、人倫論を提唱した。「諸子百家」と称し、中国思想の全てはこの時代に生まれたとされる。下って 21 世紀の今日、新たな戦争や紛争により、激動する世界情勢を迎えて、西洋の普遍的価値や国連憲章が機能しなくなり、世界は新たな思想や価値観を求めていると言えよう。果たして、中国が「人類運命共同体」理念を国際社会に広めつつ、「一帯一路」の質の高い共同建設やデジタルシルクロードの拡大をさらに推進し、どこまで世界を主導できるか。日本として中国と世界の動向を大局的に捉え、中長期戦略を立てて日本の経済貿易や技術開発を進めていく必要がある。

（了）

## II、研究発表「中華を生んだ遊牧民・鮮卑拓跋の歴史～ 異民族と中華文明～」

松下憲一・愛知学院大学文学部教授

[松下憲一氏 研究発表内容](#)



### Ⅲ、若者の中国・台湾出張報告

#### (1) 中国出張報告 奥谷伶央（東海日中関係学会運営委員）



東海日中関係学会で運営委員をしております奥谷伶央です。普段は半導体関連のメーカーで原料調達担当として仕事をしており、2023年12月と2024年1月に河南省の取引先メーカー数社へ現地監査に伺いました。今回は仕事に関するお話しはできませんが、実際に私の目で見た中国の様子をお伝えできればと思います。

私が最後に訪中したのは2018年12月に訪れた江蘇省以来であり、コロナ禍以降初めての訪中となりました。新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行されてから、中国ビザ取得要件も徐々に緩和されていますが、現在でも中国へ訪れる際はビザ取得が必須であり、ビザ取得に関わる書類準備などを考えると中国旅行への足が遠のいてしまうのではないかと感じました。私も事前に中国ビザ取得には1~2か月はかかると思っていたので、ビザ取得代行業社に依頼し2か月以上前から準備をし、無事にビザを入手することができました。早くコロナ禍以前のようにビザ免除とならないかと願っております。

何度か中国へは行ったことがありますが、河南省への訪問は初めてでした。河南省は中国で最も多くの古都があります。洛陽ではいくつもの古い建築物が建っており、その街並みの風景からは古都らしさを感じました。また、河南省の有名な観光地の一つ、嵩山にある少林寺へも仕事の合間に訪れました。10歳のころから中国武術を習っている私にとって、一度は行ってみたかった場所でしたので、とても貴重な経験となりました。少林寺へ行く道中に建っていた大きなお寺で休息を取ると、そこは孫悟空のお師匠様である三蔵法師が住んでいたといわれている「唐僧寺」というお寺でした。中に入ると驚いたことに、寺内のすべてのお賽銭箱の隅にQRコードがついており、電子決済で賽銭をすることができたのです。少林寺へ到着すると、たくさん人で賑わっている観光地でした。入口の大きな白い門から見える嵩山の広大な景色は圧巻でした。入場の際、チケット販売所の横に立っている大きなQRコードの看板に多くの人が群がりスマホでチケットを購入している光景が印象的でした。少林寺内のお賽銭箱もちろんすべてQRコード付きのものでした。少林寺の中に立っていた大木をよく見てみると何か所も無数の小さな穴が開いており、これはここで修業をしている僧侶たちが指で突いてできた穴のようです。また、少林寺の床面には

異様に凹んだ箇所がいくつもあり、これ僧侶たちの修行で何度も足を踏み込んでできた凹みであるようです。少林寺自体が昔のカンフー映画の撮影地となっており、幼少期から中国武術を練習し、カンフー映画が好きな私にとっては非常に貴重な体験となりました。

今回の現地出張を通じて感じたことはまず、QRコード決済文化が非常に進んでいるということです。至るところでの決済はもちろんのこと、レストランでの注文もQRコードを読み取りスマホでメニューを見ながら注文することや、領収書の受領もQRコードから読み取り電子で受領するといったところもありました。私は会社の出張で訪れていたのに紙の領収書が必要でしたが、電子発行のみ対応しているところは紙の領収書をもらうのに数分時間がかかっておりました。空港内や大きなショッピングモール、ホテルなどでは基本的に世界ブランドのクレジットカードが使えますが、今回ある一か所のホテルでは日本で発行したクレジットカードが使用できない場面も初めてありました。現金についてはどこでも基本的に使用できる印象ですが、お札を出すと少し怪しまれ透かしたりして本物かどうかを確認する人が多かったです。また、レジにお釣りを用意していないところも多々あり、現金を出してもお釣りが出せないといった場面もありました。私もQRコード文化の話は事前に聞いていたので、日本でAlipayやWechatpayに事前に登録し現地で使用しておりました。日本など中国以外の地域では使用できませんが、日本のクレジットカードと紐づけて中国現地でQR決済ができるのでとても便利でした。

もう一つ現地で感じたことは盛大なおもてなしです。今回初めて会社の出張でお客様側として訪中しました。取引先側は非常に歓迎ムードで、現地での送迎から食事まですべて手配してもらっていただきました。会議室に入るとテーブルの真ん中に生花の装飾やフルーツの盛り合わせ、軽食、飲み物なども並んでおりました。食事は個室で大きな中華テーブルにたくさんの中華料理が用意されており、白酒や茅台酒で歓迎の言葉とともに何度も歓迎の儀式を受けました。地域柄なのかもしれませんがなにかしらの理由をつけて、例えば大きな魚料理が来たら中華テーブルを回していき、魚の頭をこちら側の一番上席の方へ向けて「魚頭酒」をいただくなど、さまざまな方法で乾杯をしてお酒を飲んでおりました。

今回コロナ禍以降初の訪中となりましたが、やはり言葉だけでは表せない文化や意識の違いをあちこちで感じました。SNSやテレビなどでも、中国を含む海外の地域情報はたくさん入手できますが、現地で実際に目で見ても感じて知る体験は、非常に印象深いものだと改めて実感しました。またこのような機会がありましたらご報告させていただけたらと思います。

[奥谷伶央氏 報告資料](#)

## (2) 台湾出張報告 猪亦実季穂（東海日中関係学会運営委員）



東海日中関係学会の運営委員、猪亦実季穂と申します。本日は2023年の6月と11月に台湾に出張に行きましたので、台湾での仕事で感じたこと、台湾で感じたことを報告させていただきます。

まず簡単に自己紹介させていただきます。

私は名古屋外国語大学外国語学部中国語学科を卒業した後に、ハヤカワカンパニーに入社しました。大学では中国語や川村先生のゼミに所属し中国の文化等、中国に関することを学び、大学3年生の時には、大連に3ヶ月留学をし、語学を学ぶだけでなく、日本語を学ぶ中国人の学生に対して2週間、教育実習をしました。

現在は鋼材、部品、原料を扱う専門商社のハヤカワカンパニーに務めており、入社3年目になります。私は愛知県内の電動工具を扱っている会社や鍛造会社を担当していて、部品や鋼材を扱っています。仕事内容としては主に営業、生産管理、品質対応など、仕入れから販売まで一貫して担当しており、お客様と仕入先様の橋渡しをしながら、問題対応や新規営業を行っています。

では、今年の台湾の出張を報告させていただきます。台湾では、台北から桃園、台中、高雄、台南と北から南まで行きました。なぜ台湾に出張をしたのかというと、現在担当している客先に納入する部品を台湾から仕入れているためです。日本だけでなく海外にも拠点のある会社なので、台湾から仕入れて日本へ、台湾からアメリカ、イギリス、ルーマニアにも納入しています。6月はコロナ明けの訪問だったため、挨拶回り。11月には客先で問題があったため、仕入先の訪問、また製品の立ち上げで訪問してきました。

今回仕事の内容については、詳しくお話することができませんが、私が仕事で驚いたこと、また台湾で感じたこと、現在の台湾の状況を報告出来ればと思います。

まず、仕事で驚いたことについてお話します。私が驚いたことが商談の場で、社長さんが台湾式の道具を使い、台湾のお茶をいれてくれることです。日本であれば、湯のみに注がれたお茶やペットボトルでお茶が出てくることが多いと思いますが、台湾では社長自ら台湾式の道具でお茶を注いでくれました。私は初めてそんな場面に遭遇したので、最初はお茶が好きな社長さんなのだなと思ったのですが、次に訪問した仕入先も同様に社長さんが台湾式

の道具でお茶をいれてくれて、その時これが文化だと気づきました。台湾の方に聞いたら、ビジネスの場では普通で、社長のオススメのお茶を入れてくれるそうです。その時は高山茶をいれてもらったのですが、本当に美味しく、「好喝」と伝えると茶葉の匂いを嗅がせてくれて、美味しくお茶を入れる方法も教えてくれました。自慢のお茶を沢山飲んで欲しいようで、ずっと急須に手を添えていつでも注げるように構えていたので、私も慌てて飲みほしました。日本にはない文化でとても面白みを感じました。

次に台湾で感じたことを報告します。11月の出張は私1人で行ったので、夜は比較的自由で毎晩火鍋を食べに行きました。台湾は1人火鍋屋さんが多く、1人でも抵抗なく入れるお店が多かった印象です。このスライドの右下の写真は火鍋屋さんで出てきたプレートで、1人で来ている私にプレートを用意してくれて、「台湾によこそ！」と歓迎してくれました。日本人だとわかると、中国語をゆっくり話してくれたり、「今度日本に行くんだ！」や、「日本語を大学で勉強していたの！」と嬉しそうに話してくれて、日本が好きな台湾の方々が多いことを実感しました。

また台湾は日本と比べると夜遅くまでやっているお店が多い印象でした。日本だとデパートは8時に閉まりますが、台中にあった三越は夜10時までやっていて、仕事が終わって夜19時にホテルに戻っても、台湾を散策する時間が多くありました。このスライドに載せているお店は、仕事終わりでも行けたお店です。左はバーで、左上の写真は、日本の富士山をモチーフにしたお酒が売りのお店です。日本人の中でも少しずつ流行り始めているRED、中国語だと小红书でこのお店を見つけました。このお店には日本語が話せる店員さんがいて、お酒の説明を日本語でしてくれました。右側は夜12時近くまで営業していたカフェです。店内には沢山のお客さんがいました。この中でも特に印象に残っているのが、左下のANTIというバーです。台中の夜市の近くにあるバーです。私がたまたま行った時は時間が遅いこともありましたが、お客さんが誰もいなくて、3人の店員さんが私のお喋りに付き合ってくれました。ここの店員さん達も、私が日本人だとわかると、「今度福岡に行くよ！」と話してくれたり、名古屋から来たと言われると「何が有名なのか教えて！」といった話をしました。また日本のアニメやバラエティの話もしました。本当に日本にいい印象を持った人が多いと実感しました。仕事の商談の場でも、中文系、中国語学科だと言うと本当に喜んでくれて、私も日本行ったことあるよ！と喜んでくれました。

私がなぜこのバーが特に印象に残っているのかというと、会話の中で中国語はどこで学んだのかといった内容の時に、「簡体字か繁体字どちらで学んだの？」と聞かれ、素直に簡体字だと答えると、少しだけ嫌な顔をされ、あっと感じました。その時は私も咄嗟に「日本人には繁体字の方が理解しやすい」とフォローしました。

また、台湾は日本人に馴染みのあるお店が多くありました。スライドには、TSUTAYA、無印良品、ミストを載せて居ますが、他にもサイゼリヤや、ラーメン屋の一蘭など日本のお店が本当に多かったです。TSUTAYAの日本語の参考書のコーナーは興味深く、日本のコンビニや日本の和菓子などをモチーフにした参考書がありました。私もこの写真の日本のコンビニという本を購入しました。また、台湾の無印良品には日本にはない台湾のお茶などが多くあり、お土産にもピッタリでした。

また、台湾のスタバもとても興味深く、日本とは全く違うメニューばかりです。私は日本でも週に1回はスタバに行ってしまうぐらい好きなので、台湾でも5日間の滞在で新幹線に乗って移動する時などに立ち寄りました。日



本とは違うメニューになるので、いつかは全メニュー制覇したいです。

今回台湾に行ったのは久しぶりで、仕事では初めて訪問しました。旅行と仕事で訪れる台湾はやはり違う風に見えました。そして、いつ訪れても日本に良い印象を持った人が多い印象です。これは、色んな国に行っても、個人的には台湾が一番そのように感じます。商談の中で、自分自身の中国語がまだまだだと感じたので、もっと勉強をし、自分自身成長出来ればと思います。ご清聴ありがとうございました。

[猪亦実季穂 報告資料](#)